

市長記者会見記録

日時：2021年1月19日（火）14時00分～14時52分

場所：第3庁舎18階 講堂

議題：2021年ブランドメッセージポスターを作成しました（総務企画局）

第13回川崎国際環境技術展を開催します（経済労働局）

市政一般

<内容>

《2021年ブランドメッセージポスターを作成しました》

【司会】 ただいまから、定例市長記者会見を始めます。

1つ目の議題といたしまして、「2021年ブランドメッセージポスターを作成しました」についてでございます。本日は、特別ゲストとして、川崎フロンターレの中村憲剛様に御出席をいただいております。

それでは、初めに、ポスターのお披露目をさせていただきます。市長と中村様で除幕を行いますので、撮影される方は御準備よろしくお願いたします。それでは、どうぞお願いたします。

（写真撮影）

【司会】 それでは、本議題につきまして、福田市長から説明をさせていただきます。市長、よろしくお願いたします。

【市長】 それでは、改めて、2021年ブランドメッセージポスターについて御説明をさせていただきます。

今回のポスターは「KAWASAKI 20XX KENGO NAKAMURA」としまして、昨シーズンで18年間の現役生活に幕を下ろされた川崎フロンターレの中村憲剛さんに御出演をいただきました。皆様のお手元に配付しております資料のポスター左下のコピーを御覧ください。実際に中村憲剛さんにインタビューをさせていただきまして、サッカーに対する思いや、18年間という月日を過ごした川崎というまちに対する思い、そして、引退後の次のステージに向けた思いを表現したものです。コピーを読み上げさせていただきます。

子どもの頃からずっと、目の前のことだけを追いかけてきた。

気づいたら等々力にいた。

泣いた。笑った。そして現役を退いた。

今を懸命に生きることで、未来へと突き進んできた。

きっとそれは、この先も変わらない。

やること全てが挑戦になる。楽しみでたまらない。

オレはそうなんだ。

キミはどうだろう？

このポスターでは、「KAWASAKI 20XX」というタイトルとともに、新たな道へと踏み出した中村憲剛さんが抱くこれからへの期待感と3年後の2024年に市制100周年、さらにその先に向け、あらゆる取組を進化させていく本市の可能性を表現しています。

川崎の誇りである中村憲剛さんの新たな一歩と、未来に向けて本市が目指す姿を、このポスターを目にするあらゆる方と共有したいと考えています。そのような意味も含め、右側のコピー、「さ、行きますか。」には、みんなで一緒に川崎の未来をつくっていこうというメッセージを込めています。

このポスターにつきましては、今後、本市の関連施設のほか、市内の鉄道路線全駅に掲出予定です。さらに、川崎フロンターレとも連携し、市内全域で掲出してまいりたいと考えております。

私からの説明は以上です。

【司会】 続きまして、中村憲剛様からお話をいただきたいと思います。中村様、演台のほうにお願いいたします。

【中村様】 皆さん、こんにちは。中村憲剛です。ブランドメッセージポスターになりました。もともと僕自身もこのポスターの存在は知っていましたが、その役割の大きさというのは、もともと分かっていたし理解もしていましたが、今日ここに来てくださっているメディアの皆さんの数を見て、これは思った以上の大役だなと思って、今、身が引き締まる思いです。現役の選手の時ではなくて、引退した自分を使っていた川崎市の皆さんに本当に改めて感謝したいと思います。ありがとうございます。

僕自身もこれから、引退してまだ2週間ちょっとですけども、これから自分が何を目指して何を頑張っていくのかというところを模索している日々です。18年間フロンターレでやってきたこと、培ってきたことを、ポスターの文面には、インタビューのときに話をさせていただいたんですけども、その思いを持ってまた今後、引退した後の道も全力で頑張っていきたいと思っています。

その中で、地域密着も含めて、自分がブランドメッセージポスターになることで、いろんな方に思いを持っていただいたりとか考えを持っていただいたりできれば幸い

だと思っていますし、自分自身もまだまだやっていかなきゃいけないことだらけなので、3年後に100周年を迎える川崎市の皆さんの進化に自分も一緒になって進化できるようにこれから頑張っていきたいと思います。本当にありがとうございました。頑張りたいと思います。(拍手)

【司会】 ありがとうございました。それでは、本議題についての質疑応答に入らせていただきます。進行につきましては、幹事社様、よろしくお願いいたします。

【幹事社(読売)】 幹事社、読売新聞です。市長にお尋ねします。今回のポスターに中村憲剛さんを起用された理由について、改めてお聞かせいただけますでしょうか。

【市長】 このポスターは、大体9月ぐらいから企画というものを練ってきたんです。複数あったんですけど、そのときには、正直、憲剛さんのことではなかったです。11月1日に憲剛さんが電撃的な引退表明をされて、それで大変インパクトのあるショッキングな話だったんですけども、それが私たちにとってもつらいけど、御本人もそうでしょうけど、非常に前向きなメッセージを聞かせていただいて、それが川崎のこれからの前に向いていくというか、いろんな困難がありながらも次のステージにという川崎の姿と一致していることから、このタイミングで憲剛さんをお願いできないかと打診させていただいたところ、11月の中旬だったと思います。憲剛さんから心よく御快諾をいただいたという、そういった経緯です。

【幹事社(読売)】 ありがとうございます。中村さんにお尋ねします。このオファーを受けた理由をお聞かせください。

【中村様】 理由ですか。

【幹事社(読売)】 はい。

【中村様】 理由は今、福田市長がおっしゃってくれたところで僕にオファーが来たので、断る理由はない。市長も含めて、皆さんの思いも聞かせていただきましたし、僕自身も川崎フロンターレにずっと在籍して育ててもらったというところもありますので、これからの川崎市に何かしらの貢献をしたいという気持ちもありましたので、そういう意味では、先ほど言ったように、断る理由もないですし、僕でよければ力になりたいですという話をさせていただきました。

【幹事社(読売)】 ありがとうございます。あと、現役時代から様々な撮影をこなしていってらっしゃっていると思うんですけども、この撮影時に何か気を配った点などがありましたら教えていただけますか。

【中村様】 気を配ったというか、唯一懸念していたのは、ユニホームじゃないので、みんな、誰か分かるかなというのが。正直、私服でどアップなんで、分かる人は分か

るかなと思いますけど、ユニホームじゃないというのは多分結構インパクトあるので。それ以外は何のあれもなく、カメラマンさんとメイクさんに全部お任せで、きりっとした顔をするということぐらいだったですかね。ちょっと恥ずかしいですけどね。40でここまでどアップはちょっと大丈夫かなというのはありましたけど、どうですか、逆に。

【幹事社（読売）】 すてきだと思います。

【中村様】 ありがとうございます。

【幹事社（読売）】 これは等々力で撮られた……。

【中村様】 これは麻生グラウンドです。多分分かんないですよ、これ。

【幹事社（読売）】 緑の感じが、背景で。

【中村様】 麻生グラウンドです。練習後に、すごく気を遣っていただいて、時間も含めて、かなり短時間で撮っていただいたので感謝しています。

【幹事社（読売）】 市民も、こういうポスターになるというのは非常にうれしいニュースだと思います。引退の際に、セレモニーの際に、地域密着でずっと、川崎市の皆さんをサッカー以外でも笑顔にするという思いでやってきたというような趣旨のことをお話しされていたかと思いますが、引退してからも、今後も川崎に何らかの形で関わっていただけることになりそうでしょうか。

【中村様】 多分、引退後の一番最初の、お仕事という言い方はあれですけど、川崎市の皆さんとやっていくという第一歩だと、僕は、このポスター、思っているんで、先ほども言いましたけど、育ててもらったところもありますし、そういう意味では、自分が引退した後もどれだけ力になれるかというのはまだ未知数ですけども、こういうふうに使っていただいて、こういうふうに皆さんの前でお話できるということで、また川崎市の皆さんにいろんなメッセージを届けられる機会が増えるんじゃないかなとは思っているんで、ありがたいと思います。

【幹事社（読売）】 ありがとうございます。

【幹事社（NHK）】 幹事社のNHKです。中村さんにお伺いします。さっき、このメッセージを聞いたときに、すごく今のコロナの状況とかが思い浮かんでしまったんですけど、あと、最後に、「キミは」という問いかけがあったりとかですね。このメッセージを受け取られる方にどんなことを伝えたくて、こういうメッセージにされたのかというのを。

【中村様】 僕自身がインタビューをしてもらったときに、多分、こういうコピーをつくるていで話はしていたんですけど、それよりも結構いろんな話をさせてもらって、

そこから多分、言葉を紡いで、このコピーをつくっていただいたと思うんですけど、本当に自分の思ったことを全部、つくった言葉ではなくて、全部言ったものをこういうふうに形にさせていただいたので、もうこれ、僕の本心というか、自分がやってきたことを話をしている、最後の問いかけのところは、僕自身、自分自身にも問いかけているところがあって、18年間選手をやってきて、引退して、中村憲剛としてこれからどうやってやっていくんだというところで、自分の中でも問いかけているところがあったので、そういう意味では、僕自身もこれから行うこと全てが新鮮で、今、自分にもすごく期待していて、ワクワクしていますし、それを皆さんに問いかけたいという。結局、その姿勢が3年後に来る100周年に、進化に対して結びつくのかなとは思いました。

【幹事社（NHK）】 ありがとうございます。じゃ、各社さん、お願いします。

【東京】 東京新聞ですけれども、市長にも今回のポスターを見た御感想をお伺いできますでしょうか。

【市長】 やっぱり憲剛さんのどアップの顔というのは、これまで戦ってきて、記録を、そして記憶を本当に塗り替えてきた男の顔だというのが、まず、そのインパクトがすごいなというのと、先ほど憲剛さんからあったように、一つ一つのメッセージが本物という感じがしますよね。それが憲剛さんの言葉なんだけど、最終的に僕たちが問われているというか、そういう鼓舞をしてくれるというか、よし、次のステージに僕も行こうというふうな形に、僕もそう思いましたし、これを見た多くの人がそういう思いになるのではないかなと思っています。

【東京】 ありがとうございます。中村憲剛さんも、最初にポスターを御覧になったときの御感想を伺えますか。

【中村様】 さっき言ったように、ユニホームじゃないというのと、大分どアップなので大丈夫なのかなというのは、ちょっと心配にはなりましたが、ただ、すごく、次の100周年に向けてというところもあるんですという話をさせていただいて、だから、このときのイメージとしては、戦う顔もそうなんですけど、ちょっとマイルドというか、引退はもう決まっていたので、そういう次の自分のステージに対する期待みたいなところも表情には入れたつもりで、それを多分、すごくいい形でカメラマンさんが撮っていただいて採用してもらったんですけど、そういう意味では、自分で自分のことを言うのはあれですけど、すごく満足しています。よくさせていただいて、ありがとうございますという感じです。

【東京】 ちなみに、いつ頃撮られたお写真か、覚えていたらお伺いできますか。

【中村様】 いつでしたっけ。12月ですね。

【東京】 でも、まだシーズン中ですね。

【中村様】 シーズン中です。なので、すごく時間も気にしていただいて、トレーニング後だったんですけど、ぱっぱっぱっとやっていただいたので、短時間なのに、すごくいい仕事だなと思いました。

【東京】 ありがとうございます。

《新型コロナウイルス感染症について》

【朝日】 朝日新聞ですが、ポスターからやや離れますけれども、足元のコロナの収束に向けて、特に30代以下とか若い人たちに対してメッセージがあったらお願いしたいんですけども。

【中村様】 いまだかつて聞かれたことがない質問なので。サッカーの質問はいっぱいありましたけど。現状、今もたくさん苦しんでいる方がいらっしゃいますし、正直、自分も日々ニュースも見ていますし、簡単な状況ではないことは分かっているんですけど、4月、5月に比べれば、見えることは大分増えてきていて、制御することも、いろんな方がしているとは思いますが、やっぱり一番仕事に出なきゃいけない世代でもあるとは思いますが、その中で、会食だとか打合せだとかというのがあるとは思いますが、多分そこが今、一番リスクが高いと言われていていると思うので、そこはできるだけぐっと我慢して、僕は去年、最後、選手だったときも、そこら辺の我慢というか、そこはもうみんな、チームでも出してしまうと大変なことになってしまうので、そこは本当はかなり気を遣ってというか、チームでもルールも決めて、かなり厳格にやっていた。その結果、フロンターレからは出ませんでしたけれども、これも出てもしようがなかったとは思いますが。それでも、みんな一人一人が自制というか、自分たちで、自分だけじゃなくて、いろんな人に迷惑がかかってしまう、いろんな人が大変な思いをしてしまう、医療従事者の皆さんに結局大きな負荷がかかってしまうので、そこは本当に一人一人が、プロとしてもそうですけど、一人の人間として、そこはみんなですごく気を遣いながら生活していたところはあるので、本当に簡単ではないと思います。飲食店の皆さんも経営はしていかないと生きてはいけませんし、その中でみんなが工夫を凝らしながら、今やれることで最大限の利益を出せるように、みんなでやっていけばいいんじゃないかなとは思っています。

【朝日】 ありがとうございます。

【中村様】 すみません。しゃべり過ぎました。

【司会】 そのほか、いかがでしょうか。

【日テレ】 日本テレビなんですけれども、今日、このような会見にもいらっしやいましたが、引退して2週間か3週間ぐらいたっていると思うんですけど、今、引退生活というのはどのようにお過ごしでしょうか。

【中村様】 引退生活？ 何て言っているんですかね。次のステージという言い方はあれですけど、本当に、今はチームというか、フロンターレもシーズンオフなので、自分もその感覚が正直抜けてないというか、まだみんなも足並みそろえてまだ休みなので、いつもこの時期は休んでいるから、今までとは変わらないんですけど、やっぱり外に出る回数というのは、頂戴しているお仕事で外に出る回数もいつものオフより多いです。あとは、プレーヤーとして新シーズンに思いをはせることはないのも、そこが大きな違いかな。あとは、チームが始動して、自分は別のことをやっているとなったときに、初めて多分、自分が引退をしたんだなというのを、もっと強く感じるんじゃないかなと。そういう意味では、まだちょっと、はっきり引退、もちろんしたんですけど、そこまでまだ実感はしてないというか。ただ、実感はしてないんですけど、ちょっとずつ実感するような出来事が日々起こっているなど。今日の出席させてもらったこともそうですし、どんどん、どんどんサッカープレーヤーではなくて、中村憲剛としての活動が増えているなという感じはします。

【日テレ】 ありがとうございます。

【中村様】 ありがとうございます。

【司会】 そのほか、いかがでしょうか。よろしいでしょうか。

それでは、以上をもちまして、本件については終了といたします。ここで、中村様は御退席されます。ありがとうございました。

【中村様】 ありがとうございました。(拍手)

【司会】 会場のレイアウト変更を行いますので、少々お待ちください。

《第13回川崎国際環境技術展を開催します》

【司会】 それでは、次の議題に入らせていただきます。「第13回川崎国際環境技術展を開催します」について市長から説明いたします。市長、よろしく願いいたします。

【市長】 本日は、今月開催する第13回川崎国際環境技術展及び同時開催いたします第17回川崎国際エコビジネスフォーラムについて報告させていただきます。お手元の資料1ページを御覧ください。

初めに、1月21日から2月5日までオンラインで開催いたします国際環境技術展についてです。今回のテーマは、「川崎発脱炭素が拓く未来～Kawasaki Green Recove

ry～」です。本市はさきに、「脱炭素戦略 かわさきカーボンゼロチャレンジ2050」を策定し、御賛同いただいた多くの事業者・団体とともに、全国自治体に先駆けてCO₂削減の取組を始めたところです。その矢先に新型コロナウイルス感染症緊急事態宣言が発令され、地域産業は大変厳しい状況に置かれています。こうした中、13回目を迎える環境技術展を、初のオンライン展示会として実施いたします。感染リスクゼロのオンライン開催により、市内中小企業をはじめ、脱炭素社会の実現に貢献する優れた技術やノウハウを有する環境関連企業が世界に情報を発信し、コロナによって失われた営業機会や需要の回復を図るための場を提供いたします。

出展状況につきましては、5の「出展団体数」にございますとおり、136団体の出展が予定されておりまして、そのうち66団体は新規の出展者でございます。今回の開催の特徴といたしまして、6の「主なポイント」を御覧ください。

(1)にございますとおり、今回はオンライン開催となりますため、技術展へのアクセスに関して、時間や場所の制約がなくなり、より効率のよい情報収集が可能となります。また、ビジネスマッチングにつきましては、オンライン展示会場内にウェブ会議サービス、Zoomを活用した商談ルームを設けます。開催期間中は商談コンシェルジュを配置し、来場者から商談希望に応じた調整を行い、商談会をセッティングいたします。

(2)にございますように、講演・セミナーについて、今回は様々なセミナーを動画化し、オンライン上でオンデマンド配信いたします。開催期間中は無料で、いつでもどこでも何度でも視聴いただくことが可能となります。東京大学の高村ゆかり先生には、「パリ協定後の気候変動政策とビジネス：2050年ゼロエミッションに向かう世界」をテーマに、2050年ゼロエミッション実現に向けた課題や環境ビジネスの動向を御紹介いただきます。

さかなクンには、お子様からシニアまでお楽しみいただけるよう、海洋プラスチックなどの環境問題について、イラストを用いながら分かりやすく御講演いただきます。さかなクンからは、技術展に寄せてのメッセージイラストをこちらに頂戴しております。

寺島実郎先生には、ポストコロナ時代におけるグローバルビジネスの展望について御講演いただきます。

続きまして、2ページ上段に「特別対談」とありますが、かわさきカーボンゼロチャレンジ2050を策定したことを踏まえ、2050年の脱炭素社会の実現への展望について、川崎市国際環境施策参与である国連環境計画・金融イニシアチブの末吉竹

二郎特別顧問と私の対談動画を配信いたします。

そのほかに、SDGsや川崎水素戦略などの本市施策に関連したセミナーや海外展開等に関する支援機関セミナーを配信いたします。さらに、下段にありますように、市内小学5年生を対象とした環境出前授業や高校生の交流授業を民間企業と連携し、実施いたします。また、その内容をオンデマンド配信いたします。オンライン会場へのアクセス方法などにつきましては、添付のチラシを後ほど御覧ください。

次に、第17回川崎国際エコビジネスフォーラムについてでございますが、資料3ページでございますように、「都市と産業の共生に向けて～ウィズコロナ時代におけるエコビジネスの海外展開」をテーマに、技術展初日の1月21日にオンラインによる開催を予定しております。

国連環境計画アジア・ノロンハ経済局長やマーク・ラドカ副局長に「新型コロナ禍でのエコビジネスの世界的潮流」について基調講演をいただくとともに、セッションでは、「ウィズコロナ時代におけるエコビジネスの海外展開・アジア諸国を中心に」をテーマに、企業や一般社団法人、環境省という多彩な登壇者に御議論をいただきます。また、セッションにつきましては、ライブで御覧の皆様から御意見、御質問を受け付け、登壇者が回答するなど、双方向性のあるフォーラムを川崎国際環境技術展サイトからお届けする予定でございます。

以上、川崎国際環境技術展及び川崎国際エコビジネスフォーラムのほか、関連事業を通じて、川崎市は脱炭素社会の実現に向けて、グリーンイノベーションを創出するための取組を一層推進してまいります。

私からの説明は以上です。

【司会】 それでは、本議題についての質疑応答に入らせていただきます。進行につきましては、幹事社様、よろしくお願いいたします。

【幹事社（読売）】 読売新聞です。よろしくお願いいたします。環境技術展のほうなんですけれども、オンライン開催になったことで、出展団体数、136団体ということなんですけれども、増減などは何かございましたでしょうか。

【市長】 前回よりも増えておりまして……、団体数の増減みたいの、事務方からでもよろしいでしょうか。

【経済労働局】 国際経済推進室です。今回の出展、136団体となっております。

【市長】 いやいや、前回からの増減。

【経済労働局】 失礼いたしました。前回、128団体でございまして、今回、136団体と増えてございます。

【幹事社（読売）】 ありがとうございます。

【幹事社（NHK）】 それに関連して、今回増えたのは、誰でも参加できるということで、全国の団体さん、企業さんとかの参加が増えたということでしょうか。

【市長】 市内の企業についても増えていると同時に、新規の申込者というのが66ということで非常に増えているというところにあります。いろんな意味で、担当者が個別訪問などしてお誘いしたということもありますし、認知度が大分高まっていると。そして、今回、オンラインということで参加しやすいということもあると思います。中小企業には、出展料についても少し優遇をさせていただいているということも一つの理由としてあるかと思えます。

【幹事社（NHK）】 分かりました。ありがとうございます。

各社さん、お願いします。

【東京】 東京新聞ですけれども、こちら、オンラインになったことで、期間もかなり延長されているということによろしいのでしょうか。

【市長】 そうです。従来ですと2日間の開催になっておりましたが、今回はこれだけ長く延びておりますので、そういった意味でも、いつでもどこでもと、時間もかなり余裕があるので、そういった意味では、参加される方が増えることを期待しています。

【東京】 一方で、こういう技術展を、ブース出展ではなくてオンラインで行うというのは、本当に見に来たい人とか、運営も難しい部分もあるのかなと思うんですけど、これまでの御来場された方などを含めて、例えば、ネットで見られる方の利用者の人数の増減とか、もしそういった見込みが考えられていたら教えていただきたいんですが。

【市長】 予測が不可能なんですけど、ただ、今までに捉え切れなかった方たちが御来場いただけるかなというのは期待としてはあります。これまでも海外からお見えになっていたというのが、そういう意味では、全く出張してこなくてもアクセスできるとかいうこともできますし、英語での表記みたいなことにも工夫をさせていただいたりとか、そういう意味では、会場をぐるぐると回るよりも、自分のターゲットしたところにずっと入っていけるという意味では、かなりオンラインの強みを生かしていると思います。オンライン展示会というのが全国的にもまだ取組例が少なく、チャレンジングな取組だと思えますが、オンラインだからこそできる価値を今回ぜひ見つけ出したいなとは思っています。

【司会】 そのほか、いかがでしょうか。よろしいでしょうか。それでは、本件につ

きましては以上で終了とさせていただきます。

《市政一般》

《令和3年川崎市「成人の日を祝うつどい」(成人式)について》

【司会】 続きまして、市政一般に関する質疑応答をお願いします。進行につきまして、幹事社様、よろしく願いいたします。

【幹事社(読売)】 読売新聞です。先日、成人式が行われまして、オンラインとリアルに会場に集うほうと両方終わりましたけれども、コロナ禍での初の成人式となりましたが、御所感をお願いできればと思います。

【市長】 会場内では例年以上に、皆さん、参加者、こういう状況だというのはよく理解していただいた、そういう態度だったなということ非常に思わせていただきました。会場外も私、ぐるっと一周、何度か見に行ったり、あるいは駅まで見に行ったりとかいろいろやってみましたけれども、本当にごく一部、救急車にお世話になった人いますけれども、全体としては、皆さん、非常に自制的に行動されていたんじゃないかなと思います。何となく遠くから見ると、密になっているんじゃないのということも、私、割って入って、いろいろ見ましたけど、それぞれに皆さん、よく気をつけているなという感覚は私なりには思わせていただきました。本当にオンラインでの参加という形もされている方がいて、御本人が見ているのか家族が見ているのか、そういう意味でハイブリッドな形でできてよかったなと思っています。

【幹事社(読売)】 両方でやれてよかったんじゃないかなという御感想……。

【市長】 そうですね。

【幹事社(読売)】 承知しました。

《新型コロナウイルス感染症について》

【幹事社(NHK)】 NHKです。コロナ関係で、最近、自宅療養されていて、そのまま亡くなる方ですとか、あるいは、保健所が連絡を取る前に亡くなってしまった方というケースが各地であると思うんですけれども、そういった方を増やさないために、今取り得る策といいますか、対応として、もしお考えのことがあればお聞かせいただけますでしょうか。

【市長】 これまでもやってきていることではありますけれども、保健所、各区の衛生課に対する応援体制を組んでいて、やり方はそれぞれの区の状況によって少しずつ違うわけですが、なるべく切り出せる作業を切り出して、応援で組めることは組んでいこうということはやっております。これは引き続き改善しながら、応援体制を増やしていくことはやっていきたいと思っています。

一方で、これまで、今週は前週に比べて数的には若干減ってはいますけど、非常に高止まりの状況が続いているので、今までは人員を増やしてとかということをやったとしても、それ以上に新規発生者のほうが上回ってしまうということなので、そういった意味で非常に厳しい状況が現時点でも続いています。何よりも、まず新規感染者を止めるということが、対応するという事以上に、保健所の体制を強化すると同時に、そっちをしっかりとやらないと、いつまでたってもいちごっこで、大変な状況は続くかなと思っています。

【幹事社（NHK）】 ちょっと今、お話が出たので、今、どんどん増えていく状況から、今週だけかもしれないけれども、少し止まったというか、少し何かの効果が出てきたというふうな受け止めはされていらっしゃるでしょうか。

【市長】 ちょうど2週間たって、年末年始のところ、人の流れが少し止まった効果が少し出ているのかもしれないけれども、一方で、新年明けて、また人が動き始めていますので、人の流れからすると、これからさらにまた上がってくる可能性は十二分にもあるので、その辺りは注視していかなくちゃいけないなと思っています。決して全く楽観視しておりません。一時期下がったとしても、また増える要素は十分に、人の流れから見れば考えられると思っています。

【幹事社（NHK）】 ありがとうございます。

各社さん、お願いします。

【東京】 コロナの質問に関連してなんですが、市立病院の主に中等症の病床を今増やす努力をされていると思います。一方で、今、世の中の流れですと、民間病院が受け入れないのが悪いというような風潮もあったりして、病床の確保、非常に難しい部分があると思うんですけども、民間病院をめぐる議論と、あと、改めて公立病院の意義をお伺いできればと思うんですが。

【市長】 もともと、例えば川崎病院というのは市内での、いわゆる感染症に指定されている病院でありますので、そういった意味では、機材も、あるいは医師、看護師も非常にトレーニングされているという意味では、そういう機能を今まさに果たしているんだと思います。公立病院なので、やはり最後のとりでではありませんが、そういった機能はどうしても担っていかなくちゃいけないという、そういう責任感があります。民間の病院も、聖マリアンナさんをはじめ、多くの患者さんを受け入れていただいているという意味では、まさに高度な医療を持っているところが積極的に、大変な御苦勞をいただいておりますが、受け入れていただいていると思っています。

やっぱり課題となってくるのは、下り搬送の部分をしっかりと受け止めてくれる医

療機関がないと、コロナに対応している病床を増やすことができないというか、新規というよりも、今の既存のベッドを空かしていかないと目詰まりを起こしてしまう状況がずっと続いておりますので、そういった意味では、下り搬送のところで、もっと御協力をいただきたいということは思っていますし、御協力を何度も繰り返しお願いをしてきています。県からも、ぜひそういったことを言っていただきたいということをお願いしていて、また、それに向けて、いろんな発出をしていただいていると私どもは認識していますので、そういった意味では、そういった仕組みがもう少しうまくスムーズにいけばありがたいなとは思っています。粘り強く御協力を求めていきたいと思っています。

【朝日】 朝日新聞です。前回のときに、今月中旬までに、いわゆる即応病床180床、その進捗はいかがでしょうか。

【市長】 現在も随時増やしていつておりまして、155床まで現時点で増えていています。何とか今月中には即応病床に、180床の話というのは、中旬までということを行いました、少しそこに届かないかなという感じはしますが、現在進行形でそれに取り組んでいるところです。何とか180床、今月中までにはやりたいと思っっていますし、かつ、さらに、ここでかつかつだと申し上げてきたんですが、県全体でも病床を増やしていくことを考えますと、今後、人口で割り返しますと、まださらに増やしていかなくちゃいけないとなると、さらに協力をお願いしていかなくちゃいけないということで、もう既に市内の医療機関にはさらに増やしていかざるを得ないということで御協力のお願いを打診しているところでございます。

【朝日】 分かりました。反応というのはどうなんでしょうか。下り搬送の部分であるとか、これまで受け入れていなかったところの要請、お願いに上がっている反応というのは。

【市長】 それぞれだというふうには理解しています。各医療機関の事情というのがそれぞれあって、どこの病院がどこということは申し上げられませんが、それぞれの状況があってと理解しております。それは引き続き、ぜひしっかりとお願いしていきたいと思っています。

【朝日】 さっきの即応病床を中旬までにとというのは少し作業が遅れている。これは原因、理由はどんなところにあるんでしょうか。

【市長】 やはり準備していただいているんですけども、それなりに時間がかかってしまうというのは、単純にベッドを増やすというのは、看護師のシフトだとか、いろんなことで体制を整備しなくちゃいけないので、そう簡単になかなか整わないとい

うのがあります。そういったことも含めての理由だと思っていますが、とにかく早く増やさなくちゃいけないということで180ということを行っています、非常に厳しい状況が続いているということです。

【朝日】 想定していたよりも、シフトの面とか何かというのは、やってみたら難しかったということなんですか。

【市長】 もともと180というのは、理論値というか、非常に厳しいハードルだということは申し上げてきたので、そういった意味では、本当に180床まで増やしたら大変なことになるなというぐらいの数字だったわけですね。それを今、ぐっと皆さんの御協力で増やしていっていると。想定以上に増やしているというところもございます。そういった意味で、さらにこれを増やしていく、180床を超えてということになりますと、当然、一般的な通常診療に影響が出るということは全く避けられない状況になるということになります。

【朝日】 ということは、180よりさらに増やせというのは、川崎市内では結構難しいことだということですか。

【市長】 非常に難しいハードルではあります。ハードルは高いんですけど、それでもやらなくちゃいけないというのは、コロナの発生状況を鑑みれば、やらなければならない、ただ、ハードルは非常に高いという、そういう感じでしょうか。

【朝日】 医療崩壊に関わるメッセージの出し方ってなかなか難しいというのは理解するし、一般的な通常診療への影響も避けられないということもおっしゃっているので、実際どういうふうにするつもりなのかというのを、聞いているほうとしては心配になる方もいるんだと思うんですけども、今、川崎市がやろうとしていることは、一般的な通常診療は守りつつ、できる限りという理解でいいんですか。それとも、多少一般診療を痛めても、コロナの病床確保を優先するべきだとお考えなのか、その辺り、どうですか。

【市長】 これは、診療科だけに区分してというのが可能かどうかというのはあれですけれども、要するに、急を要しない診療というのは、これは制限していただかざるを得ない状況で、それでもコロナ病床を増やしていただくという、そういうことをお願いしていくことになると思います。

【朝日】 既にそういうお願いを始めている……。

【市長】 はい。何か補足ありますか。

【健康福祉局】 おっしゃるとおりです。

【司会】 そのほか、いかがでしょうか。

【幹事社（読売）】 27日に厚労省とファイザーさんと組んだワクチンの訓練があるという発表がございました。全国でも川崎市で初めて行われる訓練と聞いておりますけれども、あの訓練の内容というのは、川崎市の接種体制にもそのまま生かされると、その訓練の内容で接種が基本的には行われるものだと、そういう理解でよろしいでしょうか。

【市長】 というか、まず、あのフローをまだ誰も経験していないというのは、ワクチンの取扱いが非常に低温ですので、保管、移送、どうやって取り扱って戻していくかというのを、経験がないので、まず、そのフローを確認するという意味では、私たちにも確実に役に立つ話だと思います。受付から予診みたいなことをやって、接種するという、そういう管理みたいのをどういうふうにするのかというのは、私たちもやったことがないし、これが全国の1つのモデルとなるのではないかなと思いますので、そういった意味では、私たちのために、また、みんなのためにしっかり頑張っていきたいとは思っています。

【幹事社（読売）】 ありがとうございます。

【朝日】 すみません、コロナの関係でもう1問。今、国会で政府がやっている特措法の改正、罰則なんかを入れながらという改正ですけれども、この点について、市長、お考え、どうですか。

【市長】 専門家の間でもかなり御意見が分かれていると聞いていますし、私も、罰則みたいなものが果たして効果があるのかというのがどうなんだろうというか、正直、本当にやってみないと分からないということですけども、そうなんだろうかなと、やや、懐疑的とは言わないんですけど、どうなんだろうという、それは本当にやってみないと分からないよねという。本当にコロナのことについて思うんですけど、正しい答えなんて誰も持ってないと。だから、やってみて駄目だったら次行くしかないというふうな、朝令暮改というのは、この状況ではあり得るということをやはり許容しないといけないんじゃないかなというのを、ずっとこの間、感じています。ですから、法律改正という非常に大きなことでありますから慎重に審査をお願いしたいとは思いますが、どれが正しいかというのは本当に分からない世界だとは感じています。

【朝日】 一方で、刑事罰ということになると、それは主権の制限であったり人権の制約であったりということと絡んでくる話だと思うんですけども、そういったものでもチャレンジングにというのはやむを得ない状況なのか、この辺り、どうですか。

【市長】 そういう意味では、今、災害時だと僕は思っているんです。ただ、災害時でありながら日常生活を暮らしているので、認識を持つのが非常に難しいんですけど、

医療のことですとかを考えると、本当に命がかかっている災害時の状況なので、一定の主権制限というのは、ある意味、やむを得ないことだとは思っています。

【司会】 そのほか、いかがでしょうか。よろしいでしょうか。

それでは、以上をもちまして、定例市長記者会見を終了させていただきます。ありがとうございました。

(以上)

・この記録は、重複した言葉づかい、明らかな言い直しや質問項目などを整理した上で掲載しています。

(お問合せ) 川崎市役所総務企画局シティプロモーション推進室報道担当

電話番号：044(200)2355